

令和六年度

「モラル・エッセイ」コンテスト

優秀作品集

福島県教育委員会



令和六年度 道德教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【中学生の部】

最優秀賞

「傘の花が咲く時に」

いわき市立小名浜第二中学校

一年 滝澤 応維 さん

優秀賞

「祖母の隠し味は…」

須賀川市立仁井田中学校

三年 吉田 心埜 さん

優秀賞

「挨拶の大切さ」

南会津町立田島中学校

三年 渡部まひる さん

【高校生の部】

最優秀賞

「弟よ、ぐんぐん育て」

福島県立好間高等学校

三年 松本 美咲 さん

優秀賞

「優しい嘘」

福島県立好間高等学校

三年 星宮 唯 さん

優秀賞

「本当の友達」

福島県立好間高等学校

三年 阿部 香菜 さん

【一般の部】

最優秀賞

「ゾウさん」

会津若松市在住

小坂ひろみ さん

優秀賞

「仲間」

福島市在住

小山 雄剛 さん

優秀賞

「東日本大震災から学んだこと」

福島市在住

馬蜂 咲穂 さん

傘の花が咲く時に

いわき市立小名浜第二中学校

一年 滝澤 応維

黒、白、黒、黒……。傘の花が咲くのは雨の日に限らなくなった。

猛暑を通り越して、命の危険すら感じる暑さに、日傘は必需品となつてきている。髪型を崩すことなく、日焼けや暑さから身を守れるとあって、最近では男性でも使用している人を見かけるようになった。

環境省でも、「夏の熱ストレスを一人ひとりの工夫で低減できる暑さ対策として、暑さ指数の低減効果が比較的高い『日傘』の活用」を推進している。高機能な日傘を使用すれば熱中症警戒レベルが一段階下がるそうだ（環境省「報道発表資料」参照）。

涼をとるのに便利な日傘だが、不快な思いをすることもある。それは私の大好きなテーマパークで並んでいた時のことだ。炎天下では日傘をさしたまま列に並ぶ人も少なくない。

左手に日傘、右手に携帯扇風機もしくはスマホ……。自撮りを楽

しんでいる人の傘の露先が何度も顔や腕に当たった。すごく痛いわけではない。しかし、何度も刺さる露先に、気温と共に自分の怒りも上昇していく。

時をさかのぼること江戸時代。せまい道ですれ違う人々は、お互いに傘の雫がかからないよう、反対側に傘を傾けていたそうだ。

「傘かしげ」という文化だが、日傘でも使えるのではないかと思い、私も実践してみた。すると、混雑した場所で傘を傾けただけで、すれ違った人から、

「すみません。ありがとうございます。」

という言葉をかけられた。たったこれだけのことで、知らない人との間に良い関係が築けた気がして、嬉しくなった。ほんの少しの行動の先読みと相手への気遣いがあれば、丸く収まる問題なのだ。

傘かしげは粋な江戸の文化とされている。誰もが嫌々ではなく、自分は粋だと思つて傘をかしげられたら、怒りでモラルを問う必要もなくなるだろう。傘の花と一緒に、心の花も咲かせられたら粋だな、と私は思った。

祖母の隠し味は・・・

須賀川市立仁井田中学校

三年 吉田 心埜

私の元気の源は祖母の温かい夜ご飯です。

祖母は私が小さい頃から仕事で忙しい両親の代わりに夜ご飯のおかずを作って、私の家に来てくれます。私はご飯を持って来てくれる時の祖母の笑顔が大好きです。

「今日は煮込みハンバーグを作ってみたよ。」

「今日はあなたの大好きなグラタンだよ。」

私はその声を聞くと、宿題を中断してお皿とお箸を持って祖母のもとへ行きます。祖母のご飯はいつも温かくて栄養バランスがばっちりです。特に庭の畑で採れた甘くて美味しい野菜をふんだんに使って作られたスープは体の芯まで温めてくれます。

「おばあちゃんはなんでこんなにおいしいご飯を毎日作れるの？」

私は祖母に聞いてみました。私は良い食材を使ったり、様々なレシピを試したりしているからだと思いました。しかし祖母は、

「あなたが美味しそうに食べてくれる姿を想像すると、優しい気持ちになってそれが食材に伝わるんだよ。」

と教えてくれました。私を想って作られた肉じゃが、野菜のスープ、炊き込みご飯。祖母の優しさが隠し味となっているからこんなに身に染みるのだと気づきました。そう思うとご飯がさらに優しい味に感じて、心が温かくなりました。それを感じて食べている私の姿を見て祖母は言いました。

「おばあちゃんはその笑顔が大好きなんだよ。」

私の笑顔が祖母の原動力となり、それが私の健康の源になっていることに気づきました。

誰かを「想う」気持ち。それは何よりも優しく温かい隠し味になり、それはどんなに良い食材、調味料よりも料理が美味しくなる秘訣なのだと思います。毎日温かいご飯をお腹いっぱい食べられるということは当たり前なことではないと思います。だから私は毎日祖母に「美味しいごはんをありがとう。」という感謝の気持ちを忘れずに伝えたいです。

## 挨拶の大切さ

南会津町立田島中学校

三年 渡部 まひる

毎朝、学校に向かう道を歩いていると、いつも学校通りに住むおばあちゃんが家の窓からみんなを待っている姿を目にします。そのおばあちゃんは、私たち生徒が通るたびに、にっこりと微笑みながら「おはよう」「いってらっしゃい」という貼り紙と共に手を振ってくれます。その優しい笑顔は、朝の冷たい空気の中で私たちの心を温めてくれるのです。最初は少し恥ずかしくて、挨拶や手を振り返すのもぎこちなく感じていました。しかし、おばあちゃんの挨拶は、どんな日でも変わらず優しさに満ちていて、いつしか私も自然と笑顔で元気良く、「おはようございます」と手を振り返すようになりました。そのやりとりを繰り返すうちに心がほっとするよくな安心感が生まれ、おばあちゃん存在が私の日常の一部になっていきました。

ある日、おばあちゃんがいつもの所にいませんでした。その日は

何となく寂しい気持ちになり、改めておばあちゃんの挨拶が自分にとってどれだけ大切なものだったかに気づきました。次の日、再びおばあちゃんが「おはよう」と元気に手を振ってくれて、明るい気持ちで一日を始めることができました。

この経験を通して、私は「挨拶の持つ力」について考えるようになりました。たった一言の挨拶でも、それには相手を思いやる心が込められていて、人と人の心をつなぐ大切な役割を果たします。おばあちゃんの挨拶が私にとって一日のエネルギーの源になっているように、挨拶は人に元気や安心感を与える力を持っているのです。その小さな何気ない行動が地域全体を温かくし、心地よい雰囲気を作り出しています。私もおばあちゃんのように、挨拶を通じて人に温かさを届けられる存在でありたいと思います。そして、いつか私自身も誰かの心を少しでも明るくすることができるよう、日々の中で挨拶を大切にしていきたいです。

弟よ、ぐんぐん育て

福島県立好間高等学校

三年 松本 美咲

「おんぶして。」

太陽の光が照りつき、顔から雫が落ちる、ある暑い日。ふり返り視線を落とすと、そこには私の胸あたりまでの背丈しかない男子がいた。私の六つ下の弟だ。その日は家族みんなが休みの日で、母のお昼ご飯ができあがるまで、散歩をしていた。私は「しようがないなあ。」とその場で膝を曲げて再び弟に背を向け、両手で自らの背中をたたいた。脇と腕の間からゆっくりと弟の足が生えてきて、それをしっかりとつかみ、立ち上がった。少しの間、地面との距離が近かったせいだろう。ぼたぼたと汗が流れた。暑い。まだ小学二年生だった弟を背中に乗せて、家へと歩いた。もう四年ほど前の出来事だ。

ふとそんなことを思い出して、私は頬づえつきながら、リビングで懐かしさに浸っていた。弟もすっかり大きくなって、気づいた頃

にはあつという間に私の頭を追い抜かしていた。もう私におんぶして欲しい、と弟がねだることはないのかもしれない。少し寂しさを感じていると、「前まではおんぶしてあげていたけど、今ならおんぶされることもできるんじゃないの。」そう母が言った。エスパーカーかと思った。弟は母の言葉を聞き、立ち上がると私に背中を見せた。「あんなに小さく見えた背中がこんなに大きくなったんだ。」と成長を感じた。肩に腕を回すと、弟は私を持ち上げた。

以前よりできることが増えて、日々大きくなっていく弟を見ると、小さい時とは違うことに切ない気持ちもあるが、その反面嬉しくも思う。最近では、ご飯もたくさん食べて、苦手だった運動も、少し楽しそうだ。今までも、これからも変わらず元気に成長する弟をこの目で見ていきたい。そしていつか二人とも大人になったら、どこか綺麗なところに行つて、あんなこともあったなと思ひ出話をしながら、今度は並んで、散歩でもしたい。

優しい嘘

福島県立好間高等学校

三年 星宮 唯

私は休日、四歳の弟と公園に行くことがある。その公園は、家の近くにあつて少し小さめだが体を動かすにはもつてこいの場所だ。弟はブランコが好きで小さい身体で頑張つて座つては、よく背中を押してと頼んでくる。押しているとだんだんちよつかいをかけてくるので、私はそれに反応して弟を笑わせている。それがいつもの遊び方だった。

ある日、いつものように公園に行くと、その日は珍しく、先に遊んでいる子どもたちがいた。見たことない子だなと思いつながら手をつないでいる弟の方を見たら、不機嫌そうな顔をしていた。私が「どうしたの？」と声をかけると、弟はその場にうずくまつて怒っているような声色で何かを言っていた。公園に人がいることが気に入らなかつたようで、完全にすねていた。私はそれをなだめていると、公園で遊んでいた小学生ぐらいの三人組が、「そろそろ帰ら

ないとなあ。」「公園あきちゃったなあ。」など口々に言いながら私たちの横を通り過ぎて走り去ってしまった。弟はすぐに元気になつて、いつものように「ブランコ押して。」と頼んできたのでその後もうつものように遊んだ。

しばらく遊んだあと、帰る時間になつたので、弟に声をかけ、手をつないで帰り道を歩いていった。すると、滑り台しかない小さな公園で、さつき帰つたと思つていた小学生三人組が遊んでいた。私はその瞬間、あの子たちは弟のために気を遣つてくれていたことに気づいた。私は、その子たちの優しい行動にうれしさと、遊んでいたのに申し訳ないなという気持ちでいっぱいになった。私がその子たちに近づいてお礼を言うと、みんな照れくさそうに笑っていた。小学生の小さくて優しい嘘に触れた瞬間だった。

私は、あの時の恩返しのもりで、これからも困っている子どもを見かけたら、優しく声をかけて助けようと思つた。

本当の友達

福島県立好間高等学校

三年 阿部 香葉

高校三年の五月、私は初めて学校を休んだ。事の始まりは中間テスト最終日の午後で、めずらしく頭痛を理由にその日のアルバイトを休んでしまった。テストで頭を使いすぎたせいかなと、その時はたいして気にしなかった。

次の土曜日の朝、とてつもない虚無におそわれ体を起こすことができなかった。おかしい、昨日は頭が痛くても「頭が痛すぎておでこからビームを出そう、山破壊しそう。」などとアホなことを言えるほどには元気だったはずなのに、とにかく涙が止まらず食欲もない、そんな状態が続いた。

月曜日の朝も、よく晴れた良い天気とはうらはらに私の心は曇天で状態も悪化していた。もしかしたら、親、アルバイト、進路などの問題が一気に押し寄せていたせいで、精神的に限界になっているのかもしれないと天井を見つめながら思った。それでも学校

に行かねばと頑張って登校した日、学校の裏口の辺りで足が動かなくなってしまったところを、先生に発見され、保健室へ連行された。アスファルトに干からびたシミズがはりつくほどに暑い朝だったので助かった。その日は結局教室に入ることはできず、祖母に迎えに来てもらうことにした。

その次の日は学校に入ることはできたが、一人では教室に入らなかったのも、担任の先生に友達のNちゃんを呼んで来てもらった。彼女の顔を見た瞬間、安心して泣いた。Nちゃんはそんな私を抱きしめて「大丈夫だよ、頑張ったね。」と背中をさすってくれた。その後も私が苦しい時は、いつも程長くはげましてくる。実は私は過去のトラウマが原因で、友達というものを理解できずにいたが、彼女が教えてくれた。本当の友達ってこんなにも温かいのだと知ることができた。私は将来、県外の就職を希望しているので、遠く離れてしまうが、Nちゃんだけは一生友達でいようと思つ。



ゾウさん

会津若松市在住

小坂 ひろみ

あれはいつのことだったろう。子供たちを保育園に送るために、急いで玄関を出た時のことであった。

「ママ、そこダメ。」

と足止めをされたのである。急いでいたためイラ立ちを隠せず、

「なんで？」

と言うと、のんびりと子供たちは、

「見て!! ママ。ここにゾウさんがいるの。」

と。見るとそこは、アスファルトの地面。さらに子供たちの小さな指が差し示すところを見ると、確かに長い鼻のゾウの形をした小さな石があった。

「ゾウさん、行ってきまーす。」

とバイバイまでした子供たち。その姿を見た時、何だか恥ずかしくなったのを今でも思い出す。忙しくて、周りを見渡す余裕もなく、

イライラしながら仕事に向かって、表情すら険しくなっていた自分がいたからである。その日から、足元をふっと見て、ゾウさんに、「行ってきます。」と言うようになっていた。その私の姿を見た子供たちは喜び、毎朝一緒に言いながら家を出ることができた。

あれから二十年近くたち、子供たちも大学四年と二年、下の子どもも高校三年生となった。今では私より身体も態度も大きくなっていく。そんな彼たちではあるが、この夏休みに、

「あれ、まだゾウ、いるじゃん。」

と三人で大きな身体を小さくして地面を見つめていた。思わず笑顔になった。

新型コロナだ、地震だ、事故だ、事件だと世の中では、心が痛み、表情も険しくなってしまうような出来事が多い。そんな今だからこそ、心にゆとりをもって、前向きに、笑顔で過ごしていきたい。

朝、家を出る時、ふと足元を見る。子供たちが見つけた「ゾウさん」は今でも私たちを見送ってくれている。

「ゾウさん、行ってきます。今日も一日、がんばってくるね。」

仲間

福島市在住

小山 雄剛

新型コロナウイルス感染症が流行したとき、私は高校一年生だった。私が思い描いていた高校生活とはかけ離れた高校三年間だった。

高校二年生を迎える春のこと、明日から休校になると先生から伝えられた。当時、野球部に所属していた私は、日々の練習から解放される、これは神様からのご褒美だとちよつとした喜びの気持ちがあった。しかし、休校期間が延長され、休校明けも思い通りの生活が出来ず、目標であった春の大会や夏の甲子園とありとあらゆるものが中止になっていく。当時の三年生は涙を流し、そのストレスは下級生である私たちへ。チームのモチベーションはどんどん下がっていく。しかし、三年生の気持ちは私たち下級生も理解出来た。

そこから、新型コロナウイルス感染症は終わりを迎えているの

だと思っていた三年生の春のこと、同校の生徒が新型コロナウイルスに感染し、春の大会を辞退することになった。仲間と一緒に冬を乗り越えてきたのに、あっけなく目の前の目標がなくなってしまった。もちろん悔しかった。涙を流す仲間もいた。しかし、夏に勝ち上がるというたった一つの大きな目標はぶれなかった。もう一度、頑張ろう。このとき、私はこの仲間とプレーできてよかった、この仲間だからこそ幾度となく直面した辛い出来事を乗り越えることが出来たのだと気づいた。そして、あつという間に私の高校生活が終わった。

新型コロナウイルス感染症は、人々の当たり前を奪った。修学旅行や文化祭も中止になった学校はたくさんあるだろうし、私の学校も同じだった。しかし、私がこのような苦しみを乗り越えたとき、いつもそばには最高の仲間がいた。この出来事が私を変える大きな出来事になった。だから今の高校生に伝えたい。それは、仲間がいること。幾度となく困難に直面しても仲間と一緒に進んでくれる。この仲間にもう一度感謝したい。

東日本大震災から学んだこと

福島市在住

馬蜂 咲穂

私は、小学校一年生の時に、福島県いわき市小名浜に住んでおり、東日本大震災を経験しました。当時のことは今でも鮮明に覚えて  
います。

当時は、偶然にも下校時間が早かったため、すでに帰宅していま  
した。母と弟二人も一緒にいたのでそれだけが不幸中の幸いでし  
た。私は普段通り学校の宿題を行っていました。すると突然、緊急  
地震速報が鳴り響きました。当時は初めて聞く音だったのでとて  
も驚いたと同時に恐怖も感じました。母は緊急地震速報が鳴ると、  
すぐに私たちにテーブルの下に隠れるよう指示しました。直後に  
感じたことのない大きな揺れを感じました。それで終わりかと思  
いきやなんと次は天津波警報が出されました。次々と起こる災害  
に、当時の私は混乱し、不安と恐怖心でいっぱいでした。

その後が何より大変でした。水が出なくなり、学校にも行けなく

なりました。近くの地域は津波の被害により悲惨な状況でした。そ  
んな状況でも、地域の人々の絆はかけがえのないものでした。

「困ったときはお互い様」という言葉をよく耳にしました。水も  
食料も十分に確保できない中で生活しなくてはいけなかったので、  
地域の人々同士の協力が欠かせませんでした。「困ったときはお互  
い様」と言って助け合っている姿は今でも印象に残っています。

災害はいつ起こるかわかりません。私も、母が緊急地震速報や地  
震が起きたときの身の守り方、近くの避難所を把握できていなけ  
れば、命を落としていたかもしれせん。私はこの経験を通して、  
日頃の備えを甘く見てはいけなさと学びました。また、災害がもし  
起こったときは、人々が助け合うことで、お互いの命をみんなで守  
ることが出来ると実感しました。いざというときのために、「困っ  
たときはお互い様」という気持ちを常に持ち続けることが大切だ  
と、私は思います。

